「木場の窓から見えるもの（元外交官の視点）」

当社顧問石井正文氏（前駐インドネシア日本国大使）による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第 52 回：「3羽の鷹」と「烏合の衆」；上海協力機構(SCO)の限界　2023年7月13日配信

【ポイント】

■上海協力機構(以下、SCO)は、7月4日インド主催で第23回首脳会議をオンラインで開催

・具体的「成果」はイランの正式加盟決定だが、それ以外に見るべき成果無し

・逆に中・ロ・印の「3羽の鷹」の思惑の違いが滲み出た格好＝SCOに過大な警戒は不要

【本文】

■SCOは2001年に中ロと中央アジア諸国4ヶ国（ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン）の6カ国で発足した地域的会合。 背景には当時の中ロの思惑の一致有り。

・中国はソ連崩壊後独立したが未だ不安定だった中央アジア諸国との関係安定化を模索

＊同諸国の不安定化はイスラムやテロの中国への浸透を招きかねない

・ロシアは同諸国への影響力維持と中国との経済関係強化を目標

■その後2005年にオブザーバー参加したインド、パキスタンが2015年には正式加盟

・これにより、当初の目的とは変貌し、既存勢力と距離を置く中東・南/東南/中央アジアの国々の地域的プラットフォームへと変化

・各国の思惑の差（＝共通利益希薄）や対立関係(印⇔パキスタン、印⇔中)で限界内包

■今次会合で(2005年以降オブザーバー参加の)イランの正式加盟決定＝9カ国が加盟国

・それ以外にも多くのオブザーバー国や対話パートナーが参加。「烏合の衆」化が顕著

＊オブザーバー；6カ国(アフガニスタン、ﾍﾞﾗﾙｰｼ、ラオス、ﾓﾝｺﾞﾙ、北朝鮮、ﾍﾞﾄﾅﾑ)

＊対話パートナー；9カ国(ｱｾﾞﾙﾊﾞｲｼﾞｬﾝ、アルメニア、カンボジア、ネパール、トルコ、スリランカ、カタール、ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ、エジプト)

＊対話パートナー手続中；5ヶ国(ア首連、ﾐｬﾝﾏｰ、クウェート、ﾊﾞﾊﾚｰﾝ、モルディブ)

■今次首脳会合では各国の団結を標榜。しかし、実際は「３羽の鷹」（中国、ロシア、インド）の思惑の違いが滲み出た格好＝SCOに過大な警戒をする必要無し

・プーチン大統領；ワグネルの乱後の初めての国際会議出席

＊自らの健在とウクライナ戦争への「国際社会」の支持を誇示する場と位置付け

＊西側制裁を念頭に、SCO加盟国間の貿易促進のため新たな銀行・通貨メカニズム創設の必要性を指摘した模様だが、今後具体的動きが出てくる可能性は高いとは思われない

・習近平主席；米国批判と中国基準の宣伝

＊SCOはグローバル・ガバナンス改善と「中国的近代化」促進の場だと発言

＊「中国的近代化」＝中国とパートナーが国際ルールにより大きな発言権を持つ世界

・モディ首相；対西側関係と対中ロ関係をバランスさせる場＋特定の国益実現

＊インドの最大の挑戦は中国＝対米接近でバランス(直前の訪米）＋対ロ関係維持

＊パキスタンを念頭に、テロを外交手段に使う国々を一致して非難すべきことを表明

＊隠れたアジェンダは中央アジア諸国との接点の維持。これがあるからこそ、「烏合の衆」の会合でも参加継続に利益

-エネルギー供給源の多様化＋対パキスタン関係のレベレッジとして、中央アジア諸国を通じたアフガニスタンへの影響力維持

-モディ首相は、さりげなくイラン・チャバハール港へのインドの投資に言及し、中央アジアに恩を売った(＝中央アジア内陸国のインド洋アクセスの重要ルート)

■次の注目は、８月２２日～２４日にヨハネスバーグで開催される予定のBRICS首脳会合

・BRICS＝ブラジル、ロシア、インド、中国、南ア

＊均質性が限られ行動力には限界が有るが、ネガティブ・パワーとしての「発信力」はSCOよりは強い＝一定程度注意が必要

・プーチン大統領が国際刑事裁判所から訴追されていることも複雑化要因

＊南アはICC加盟国＝自国での逮捕に協力する義務→どのように開催するのか？

＊今回インドはSCO首脳会合をオンラインで実施＋かつ、インドはICC非加盟

（以上）

りそな総合研究所　顧問　石井正文